

大阪の阿呆・阪田素夫

関谷 大陸

【目的】

サカタインクス躍進の立役者である大物企業家、戦後日本のキリスト教布教の中心人物、作家・阪田寛夫の父という三つの側面で大きな足跡を残した阪田素夫（1889 年～1961 年/明治 22 年～昭和 36 年）を考察、再評価する。

【内容】

阪田素夫には、①クリスチャン、②企業家、③阪田寛夫の父という三つの側面がある。クリスチャンとしての大きな功績は、南大阪教会設立である。南大阪教会礼拝堂と塔屋は、1926 年（大正 5 年）、当時駆け出しであった村野藤吾の設計によって建設された。阪田は建築委員に名を連ね、村野起用の決定に大きく関与した。なお礼拝堂は、老朽化により 1981 年（昭和 56 年）に建て直されたが、この時の設計も村野であり建築家村野藤吾、最後の傑作と評される。新礼拝堂完成記念式典には息子である阪田寛夫が参加し、村野と寛夫の貴重なツーショット写真も残っている。

企業家としては、父・恒四郎が設立したインク会社・阪田商会（現在のサカタインクス）の社長に就任すると自らインクの改良に乗り出し、ワニスの国産化、高速輪転機にあったインクの供給、赤インクの改良などを成功させ、新聞社やテレビ業界にも影響力をもった。収入の大半や阪田商会の利益をあちこちの募金に使ってしまうため、重役たちから厳重に監視されており、そのことから「大阪の阿呆」と自称した。

息子、阪田寛夫は、クリスチャンとしての思い出を頻繁に書くが、言うまでもなく作品には父の影響が色濃く反映している。デビュー作『音楽入門』はじめ多くの作品が素夫を想起させる。阪田寛夫という作家を形づくったのは素夫であると言える。

【結果】

阪田素夫は、その生き方において一貫してクリスチャンとしての信仰を礎とした。そこに育まれた自由と奉仕の精神と共に、クリスチャン迫害の時代を生き抜き、そのような時代においてこそ社会の中で信仰を実現しようとした逞しさ、何ものにも囚われることのない柔軟な価値観が、阪田という人物を形づくっている。豪放磊落でありつつ他者を見つめるあたたかい眼差しは、息子である寛夫の作品に息づいている。日本の草創期に築いた教会、企業、文化など阪田の残した功績は、時代を超え人々の営みの中で変化・発展しながら、阪田素夫という人物の魅力を伝え続けている。

1. はじめに

企業家、宗教者として大阪の発展に大きく貢献しつつも、現在ではほとんど語られることのない阪田素夫（1889～1961 年/明治 22 年～昭和 36 年）の功績について多角的に述べる。



2. クリスマンとして

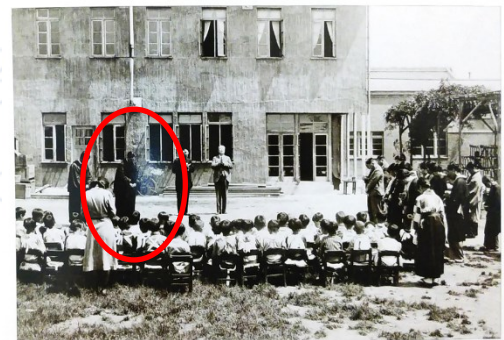
阪田素夫のクリスマンとしての大きな功績には以下のようなものがある。

2-1. 南大阪教会設立

南大阪教会は、1926 年（大正 5 年）に設立され、1928 年（大正 7 年）に礼拝堂と塔屋が建てられた。設計は、当時駆け出しの建築家・村野藤吾。村野の実質的なデビュー作である。阪田は建築委員に名を連ね、村野起用の決定に大きく寄与した。会堂完成後は、オルガンや 2,390 円の募金などを精力的に行っている。



また、教会創立より 3 年早い 1923 年（大正 2 年）から日曜学校が行われており、教会創立にあたっては、キリスト教主義幼稚園を共に創るというのが教会員の悲願であった。そこに阪田が尽力。1930 年（大正 9 年）に幼稚園を開園し、初代園長となる。



開設された幼稚園は歴代園長、主役、教師たちにより前進した 1930(昭和5年4月)

なお、礼拝堂は老朽化により 1981 年（昭和 56 年）に建て直されることとなるが、この新会堂設計もふたたび村野に依頼。この頃村野は、90 歳を前に「日本芸術院会員」「文化勲章受章者」など生ける伝説であったが、「旧教会堂は、いわばわたしの長男。壊されるのは忍びなかったが、せめてわたしの二男を、と思い、また“最後の仕事”だとも考えて設計しました」（『南大阪教会五十年史』）と再び快諾する。この新会堂完成記念式典には息子である阪田寛夫が駆けつけ、村野と寛夫の貴重なツーショット写真が残されている。



喜びの式典に馳せ参じて下さった村野藤吾氏と阪田寛夫氏

2-2. 奈良大和教会設立

1955 年（昭和 30 年）、近鉄不動産は沿線開発の大事業として学園前周辺の山林地帯の宅地造成を企画していた。近鉄社長・佐伯勇は、妻がクリスチャンである縁から阪田と深い交流があり、「新しい街づくりは精神的な聖域環境からスタートせねばならない」との信念から「古都東の東大寺からは大仏殿の鐘の音がゴーンと鳴り響き、新都学園前では、基督教の塔屋から美しい賛美歌が街いっばいに流れるといった光景が実現する」と、学園前の中心に教会を建てる計画への協力を阪田に依頼した。

阪田は「待ってました」と佐伯の手を握り、全面協力を約束した。阪田は、人脈をフルに活用し資金調達をすると共に、南大阪教会の信徒を奈良に移すことによって佐伯の目指す街づくりの基礎を形作ること尽力し、教会の建設に至った。その後、基督教主義大学の招致のために精力的に活動するさなか、病に倒れ、72 歳にして志半ばで亡くなった。

3. 企業家として

企業家 阪田素夫は、父・恒四郎が設立したインク会社・阪田商会（現在のサカタインクス）の社長に就任すると、自らインクの改良に乗り出し、ワニスの国産化、高速輪転機にあったインクの供給、赤インクの改良などを成功させる。さらには、アンペックスのビデオレコーダーの輸入など阪田商会の多角経営化によって規模を一気に拡大、現在のサカタインクスの基礎を築いた。また、インク工業の同業者組合設立にも尽力し、業界全体のために働いた。

新聞インクの製造を行っていたことから新聞社との関係も深かった。公器としての新聞を守るため、カーボンブラック製造にも着手。またアンペックス輸入などの関係でテレビ業界にも力を持ち、大阪テレビ設立準備会には、杉道助、太田恒士郎、寺田甚吉らと共に名を連ね、朝日放送の監査も、大阪ガスの井口竹次郎、阪神の野田誠三、関西大学学長の竹田省、日本生命の弘世現、倉敷絹織の大原総一郎、関佳三、近鉄の佐伯勇らと共に務めている。阪田寛夫が朝日放送に入社した際の面接官の一人が阪田素夫であった。

自身の収入の大半や、阪田商会の利益をあちこちへの募金に使ってしまうため、重役たちから厳重に監視されており、そういったことから「大阪の阿呆」と自称した。

阪田インク小唄 作詞：西條八十

濡羽鳥かあの娘の髪か 刷りはくつきり月夜の窓の 松の影ほどあざやかに
黒は黒でも現代黒よ 軽くやさしく柔らかに 朝な夕なの新聞ながら 染めた匂ひのなつかしく

4. 阪田寛夫（1925－2005）の父として

阪田寛夫がクリスチャンであるのは言うまでもなく父の影響である。父が聖歌隊でバスを務めていたことが寛夫の音楽経験の原点であり、デビュー作「音楽入門」は素夫をモデルにしている。作中、介護される父が「君たちハ、ジンケンジュウリンダ。ブンナグルゾ」とたどたどしく怒り出した時のエピソードは、逆境においてもどこかユーモラスな父である素夫を見つめ、それを受け継いだいたずらっ子のような寛夫の楽しさがうかがえる。



阪田文学を一貫しているのは、「熱心なキリスト教徒であった両親の下で、生れる前から讃美歌を聞いて育った人の文学であることです。父親は南大阪組合教会役員（阪田素夫）、母は教会オルガン奏者でした」（『阪田寛夫の文学』）。寛夫は、戦争の傷を賛美歌を歌うことで癒し、幼い頃は賛美歌の言葉をおもちゃにしていたすら盛りの子どもらしい歌を作っている。「サッちゃん」、「ああめん そうめん ひやそうめん」、「おなかのへるうた」、「そうだ村の村長さん」、「ねこふんじゃった」など、寛夫の詩や童謡には子どもの純粋な心、いたずら心一杯の作品が多くみられる。

ああめん そうめん ひやそうめん

ああめんそうめん ひやそうめん 夕日にそめた ひやそうめん

ぶりきたたいて かんからかん とうさんいびょうで しんじやった

ああめん そうめん ひやそうめん 夕日にまっかな ひやそうめん

オイノリ

カミサマ アシタハ イイオテンキデスカラ

カワヘ ハマッテ クダサイ ドンブリッコ アーメン

5. 最後に

阪田寛夫の作品を読み解くとき、そこに父、阪田素夫の大胆さとユーモア、堅い信仰が受け継がれている。阪田素夫の功績を追うと、神出鬼没、驚くべき場所にその名を見つけることができる。日本の草創期に揺るぎのない信仰を礎とし、大胆ながらも緻密な計画と、アイデアとユーモアと行動力で築いた阪田素夫の功績を再評価し、後世に伝え残したい。

参考文献

- 朝日放送 編『ABC 朝日放送創業五周年記念』アルカディア書房、1956 年
- 朝日放送 十周年記念誌編集委員会編『ABC 十年』朝日放送、1961 年
- 印刷往来社 編『印刷産業綜覧 昭和 12 年版』印刷往来社、1937 年
- 印刷興業時報社『全国印刷材料業者総覧』国立国会図書館デジタルコレクション 1935 年
- 印刷時報社「月刊 印刷時報 7 月号」(170)、印刷時報社、1958 年
- 印刷時報社「月刊 印刷時報 12 月号」(175)、印刷時報社、1958 年
- 印刷時報社「月刊 印刷時報」(209)、印刷時報社、1961 年
- 印刷時報社「月刊 印刷時報」(265)、印刷時報社、1966 年
- 海老沢義道『斉藤惣一と YMCA』斉藤伝記念出版委員会、1965 年
- 大阪経済評論社 編「大阪経済評論」25(4)、大阪経済評論社、1942 年
- 大阪経済評論社 編「大阪経済評論」42(11)(502)、大阪経済評論社、1959 年
- 大阪市会事務局調査課 編『大阪市会史 第 26 巻 資料編』大阪市会事務局調査課、1987 年
- 大阪市会事務局調査課 編『大阪市会史 第 26 巻 [本編]』大阪市会事務局調査課、1988 年
- 大阪市商工課 編『大阪市商工名鑑 大正 15 年度用』工業之日本社、1926 年
- 大阪出版社『印刷時報』(6 月号)(177)、大阪出版社、1940 年
- 大阪新夕刊新聞社企画室 編「大阪現勢. 昭和 37 年版」大阪新夕刊新聞社、1961 年
- 大阪府総務部統計課 編『大阪府統計年鑑 昭和 37 年版』大阪府総務部統計課、1962 年
- 大阪毎日新聞社 編『日本都市大観』東京日日新聞社/大阪毎日新聞社、1936 年
- 大星 義明編『現代財界家系譜 第 4 巻』現代名士家系譜刊行会、1970 年
- 「開拓者 10 月号〈明治 40 年代の YMCA 英語教師〉」4(11)、1909 年
- 「開拓者」50(8)(509)、1955 年
- 関西経営者協会「関西経協」16(8)、関西経営者協会、1962 年
- キネマ旬報社『キネマ旬報年鑑 昭和 35 年版』キネマ旬報社、1960 年
- 雲の柱社、警醒社書店『雲の柱 19(7)』雲の柱社、1940 年
- 河崎良二『阪田寛夫の文学』帝塚山派文学学会 紀要 創刊号、2017 年
- 関西学院大学『関西学院七十年史』関西学院七十周年記念事業中央委員会、1959 年
- キリスト新聞社 編『基督教年鑑 昭和 23 年版』キリスト新聞社、1948 年
- キリスト新聞社 編『基督教年鑑 1962 年版』キリスト出版社、1962 年
- 久志本喜代士『北支事変誌銃後の護り』渋谷印刷社出版部、1937 年
- 蔵前工業会「蔵前工業会誌」(519) 蔵前工業会、1957 年
- 工業之日本社 編『日本工業要鑑 大正 3・4 年度用 (第 6 版)』1926 年
- 神戸女学院八十年史編集委員会『神戸女学院八十年史』神戸女学院、1955 年
- 国勢協会 編『国勢総覧 第 8 版』国際連合通信社、1953 年
- サカタインクス株式会社社史編集室 編『一世紀のあゆみ：1896-1996』1997 年
- 阪田寛夫「音楽入門」『うるわしきあさも一阪田寛夫短篇集音楽』講談社、2007 年
- 阪田寛夫、文藝春秋編「父の書いた社は」『私たちが生きた 20 世紀下』p.102-103、2000 年

産業経済新聞社「産経日本紳士年鑑 第2版 別冊付録」産経新聞年鑑局、1960年
島屋政一『印刷文明史 索引』印刷文明史刊行会、1934年
商業興信所『日本全国銀行会社録 第50回 上巻』日本全国銀行会社録、1942年
商工省大臣官房統計課『全国工場通覧』柏書房、1992年
実業之世界社、三田商業研究会「実業の世界」56(10)、実業之世界社、1959年
人事興信所 編『人事興信録 第13版 上巻』人事興信所、1941年
杉山元治郎伝刊行会 編『土地と自由のために：杉山元治郎伝』杉山元治郎伝刊行会、1966年
関谷大陸『村野藤吾と南大阪教会 - 阪田素夫から寛夫へ』2023年。別紙（パワーポイント）参照
全日本業界人物大成刊行会『全日本業界人物大成 坤巻』1932年
ダイヤモンド社 編『ポケット会社要覧 昭和18年版』ダイヤモンド社、1943年
伊達俊光『大大阪と文化：長春庵随想録』金尾文淵堂、1942年
中央電気倶楽部『随想十年』中央電気倶楽部、1962年
鉄興社社史編纂委員会 編『鉄興社35年史』鉄興社、1961年
東京商工会議所『東京商工名簿 1927年－1952年』都立図書館蔵、1952年
比屋根安定 編著『東京神学大学二十年史』東京神学大学、1964年
内藤啓子『枕詞はサっちゃん―照れやな詩人、父・阪田寛夫の人生』新潮文庫、2020年
日本基督教団 編『日本基督教団年鑑』1943年
日本新聞インキ株式会社 編『日本新聞インキ株式会社創業拾年史』日本新聞インキ株式会社、1954年
日本新聞協会 編「別冊新聞研究：聴きとりでつづる新聞史」(34)、日本新聞協会、1998年
日本キリスト教婦人矯風会 編「婦人新報 9月」ドメス出版、1991年
日本経済新報社「日本経済新報」12(50)、日本経済新報社、1959年
日本民間放送連盟『民間放送十年史』日本民間放送連盟、1961年
日本ライトハウス四十年史編集委員会 編『日本ライトハウス40年史』日本ライトハウス、1962年
梅花学園九十年小史編集委員会 編『梅花学園九十年小史』梅花学園、1968年
文春文庫 編『私たちが生きた20世紀』2000年
毎日放送『毎日放送十年史』毎日放送、1961年
増尾信之 編『印刷インキ工業史』日本印刷インキ工業連合会、1955年
南大阪教会 編『南大阪教会五十年史/付・南大阪幼稚園四十五年史』1976年
南大阪教会 編『南大阪教会70年史』1999年
南大阪教会に生きた人びと刊行委員会 編『南大阪教会に生きた人びと』2001年
万朝報社 編『新日本史 別篇』万朝報社、1928年
南満州鉄道株式会社中央試験所『特許発明分類総覧 化学工業之部』1942年
都田恒太郎『世界聖書紀行』比叡書房、1953年
桃山学院史料室 編『桃山学院年史紀要』桃山学院、1998年
諸星千代吉商店『諸星千代吉商店四十年史』国立国会図書館、1932年
文部省 編『宗教便覧』法政大学出版局、1954年